キャラクター名
長崎 淳(ながさき あつし)

プレイヤー名

シンドローム	キュマイラ ノイマン	ワークス	UGNエージェントB	カヴァー	
オプショナル		年齢	27歳	性別	男
覚醒	渇望	衝動	飢餓	初期侵食率	36 %
出自	義理の両親	経験	仲間の死	邂逅	恩人

	基本値	ワークス	ボーナス	成長	他修正	能力値
肉体	3	0	0			3
感覚	0	1	0			1
精神	3	0	0			3
社会	2	0	0			2

HP	29
行動値	5
(非装備時)	5
戦闘移動	10
全力移動	20

肉体			感覚			精神			社会		
技能	SL	修正	技能	SL	修正	技能	SL	修正	技能	SL	修正
白兵			射撃	1		ＲＣ	1		交渉		
回避			知覚	1		意志	4	1	調達	2	
運転：			芸術：			知識：			情報：UGN	1	
運転：			芸術：			知識：			情報：		
運転：			芸術：			知識：			情報：		
運転：			芸術：			知識：			情報：		
運転：			芸術：			知識：			情報：		

武器・コンボ	能力	命中値	G値	攻撃力	射程	メモ
クリスタルシールド	白兵	3r-1	12	0		
クリスタルシールド	白兵	3r-1	12	0		
虎包(こほう)		0	24			エフェクト:②+③+④+⑤, コスト10, バステの影響を受けず, カバーリングしてこのの武器でガード, ガード値+3D10。
虎圧包(こおうほう)		0	24			エフェクト:①+②+③+④+⑤, コスト14, バステの影響を受けず, ガードできずにガードでき, カバーリングしてこのの武器でガード, ガード値+3D10。

防具	価格	装甲	回避	行動	メモ
強化服	1	1	-	-	

合計装甲：	1	合計回避：	0

所持品	
思い出の一品	
ウェポンケース	

ロイス				
対象	感情(pos)	感情(neg)	タイタス	消費
守護者	P	N		
カタツムリ	P 感服	N 嫌気		
義父母	P 尽力	N 嫌悪		
FHセル〈アスボロディ〉	P 執着	N 猜疑心		
	P	N		
	P	N		
	P	N		

最大財産P:	38	残り財産P：	3

スキル名	SL	コスト	タイミング	射程	対象	判定	制限	メモ
ワーディング	★	-	オート	視界	シーン	自動	-	
効果：非オーヴァードのエキストラ化								
リザレクト	0	1d10	気絶時	-	自身	自動	↓100	
効果：コスト分のHPで復活								
パワーアーム	1	-	常時	至近	自身	自動	-	
効果：「これを装備している間、他の武器を装備できない」武器でも、他の武器を装備できる。 侵蝕率基本値+3。								
ブラックマーケット	3	-	常時	至近	自身	自動	-	
効果：常備化ポイント+[LV×10]。 侵蝕率基本値+2。								
鋼の肉体	1	2	メジャー	至近	自身	自動	-	
効果：暴走以外のバステをすべて回復し、HPを[(LV)D+【肉体】]回復。								
獣の誇り	2	2	オート	至近	自身	自動	-	
効果：重圧を受けていても使用可能。ガード時宣言し、バステの影響を受けなくなる。シーンLV回。								
軍神の守り	1	2	オート	至近	自身	自動	-	
効果：カバーリングする。メインプロセス1回。								
八重垣	1	3	オート	至近	自身	自動	-	
効果：ガードの際、二つのガード値を合計して行う。								
イージスの盾	3	3	オート	至近	自身	自動	-	
効果：ガード値+(LV)D。								
庇護の獣	3	4	オート	至近	自身	自動	100↑	
効果：リアクション不可、ガード不可を無効にする。シナリオLV回								
刹那の勝機	1	4D10	オート	至近	自身	自動	120↑	
効果：重圧を受けても使用可。HPダメージを０にする。シナリオ1回。								
猫の瞳	★							
効果：暗闇でも見えるぞ。								
体系維持	★							
効果：いっぱい食べても大丈夫。								
効果：								
効果：								

大きな体躯で味方を護るUGNエージェント。
威圧感のある顔をしているが、礼儀を重んじて人と接する。
戦闘時は二足歩行の獣と化し、さらに大きくなる。
巨大な盾を、さらに巨大な腕で二つ構え、敵を半ば包み込むかのようにして攻撃を阻む。
猫が好き。

かつての敦はグレてやんちゃしていた。
自慢の大きな体にモノ言わせて、街を肩で風を切って歩く敦に、寄り添おうと思うものはいなかった。
孤独感と消失感で飢えていた淳はこの時に能力に目覚めたのだった。
自分が異能を宿していることに気づいたきっかけは、何気なくベンチに腰掛けていた時のことだった。
「お前のせいでアジサイのところに行けないじゃないか、どいてくれよ」
生意気な口を聞かれて声の方を見ると、そこにはカタツムリがいた。
「俺はカタツムリだぜ？　鈍足の俺に回り込めって言うのかよ、このナメクジ野郎」
暴言を吐かれたが、相手はカタツムリ。淳は怒る気にもならず、アジサイの元までカタツムリを運んでやった。
「気安く触るんじゃないよ全く……　お前に寄生虫とかついたらどうすんだ」
と、嫌味を言うように自分を心配するカタツムリが、敦はどうも気になった。
「俺は子供たちの人気者。　なんたってカタツムリだ。　殻のないやつとは違うぜ」
「は、ナメクジ？　あんなやつと一緒にすんな。　俺は立派な殻を被ったカタツムリだぜ」
「俺の殻は綺麗だろ？　仲間内じゃ銀河に例えられてるんだ。　ナメクジのやつはこれがないからなぁ」
自身たっぷりのカタツムリと自分との関係を馬鹿馬鹿しいとは思ったが、それが救いだった。
ある日淳は、カタツムリの自分の悩みを打ち明けた。
「そうか、お前の両親、血が繋がってないんだな。　それでグレちまったって……　そういうことか」